ヨーロッパの旅（十二）

平井信義

マールブルクの夜は、次第にふけていく。駅前の通りをまっすぐにつき当ったところにあるこのホテルも、通りの裏手にある一室となると、物音一つしない。外は、暗やみである。ふと、二重になった窓を開いて、やみを見詰める。へやの灯がほのかに崖に生えた木々の輪郭をうつし出しているが、はっきりとは見えない。その崖の上には林が続き、さらにその林をのぼり詰めたところに、お城がそびえているはずである。

このお城へは、何回のぼっているであろうか。第一回は、十六年前、初めて西ドイツに留学した時であった。人通りの少ない石畳の登り道は、霧がたちこめていた。登っていくにつれて、その霧は濃さを増し、私の鼻や口をふさぐのではないかと思うほどであった。坂道が急になるほど、そのような感じが強くなって、外には人影の見えない霧の中で、不安になったのを思い出す。しかし、坂道を登り詰めた時に、霧に漂いながらも巨大なお城の壁が私の目をさえぎり、その高みに蔦のからんだ小さな窓が見えると、ベンチに腰をおろした私の頭の中に、幻想がわいてくるのであった。

このお城に誰が住んでいたのか、どのような歴史をもっているのか、私は知らなかった。しかし、その小窓からかわいい女の子がのぞいたことがあるにちがいない。

――その子は多くの侍女を相手に暮しており、遙か目の下に小さな影となって走り回っている子どもたちの姿を見ることはできても、その子どもたちと遊ぶことは許されていなかった。

あの子たちと遊びたい――どうぞそれがかなえられますように――と、毎晩女の子はお祈りを続けた。また、食卓にでるいろいろなごちそうやお菓子を、その子どもたちに分けてあげたいという想いから、少しずつ残すようになり、日増しにその分量が多くなっていった。その心は、侍女たちには通じなかったし、王様やお妃様の心を暗くした。いろいろな方法で、かわいい姫の心を引きたてようとしたし、その理由をいってごらんともたずねた。しかし、その答が両親の心を暗くすることを知っていた姫はなにも答えようとしなかった。

ある夜、女の子は、ふともの音がするのに気がついた。そのもの音は、風もないのに草がゆれ、それらがふれ合う音であった。そっとベッドから降り、しのび足で窓べに寄ってみると、窓の外では何人かの妖精が、お城の石のわずかなくぼみに足をかけて、お城の壁をはうようにして生えている蔦で、はしごを編んでいるのであった。窓べに女の子の姿が映った瞬間に、妖精たちの姿は、クモの子を散らすように見えなくなった。しかし、その次の夜も、またその次の夜も、草がゆれ、それらがふれ合う音は続いた。女の子はじっとその音をききながら、ベッドの中に身をひそめていた。次の夜も、また次の夜も、そしていく夜も、不安と期待の中でその音をきいた。

ついに、何の音もしない夜がやってきた。姫はじっときき耳を立てていたが、戸外はひっそりしていた。また、きき耳を立てたが、もの音一つしなかった。ふとんの中から起き出した姫は、窓べに近づいた。そして、そっと小窓をあけて、下をのぞいた。そこには、谷の底まで、蔦で編んだはしごが青黒く続いていた。

そのはしごにさそわれて、姫はそれを伝って降りる決意をした。着物に着がえ、窓べに足をかけて窓わくをふみ越えると、ひと足ひと足と、蔦のはしごを降りていった。足をかけるたびに、それがゆらぐのではないかと不安になったが、はしごはきちっと足をささえてくれたので、難なく地上に降り立つことができた。

そのあと、どのような足どりをたどったのか、女の子にはわからなかった。町かどの灯りをたよりに、右に曲がり左に曲がりながら、石畳の上を歩いていくと、広い窓に灯りがこうこうとはえている家にたどりついた。

窓からそっと中をのぞいてみると、姫と同じ年ごろの女の子とふたりの弟たちが楽しそうに玩具で遊んでいる姿が目にうつり、その背後には、おとうさんとおかあさんとが、おとうさんは新聞を読み、おかあさんは編物をしながら、時々子どもの遊びを見ている姿が見えた。

トントントンと戸口をたたくと、「はあい」という元気のよい

声がして、女の子が戸をあけてくれた。それは、姫を待ち受けているようであった。

四人の子どもたちは、ひとしきり楽しく遊んだ。姫には、初めて経験する楽しいひと時であり、帰る気持は全く起きないほどであった。しかし、あたりが少しずつ白むころ、子どもたちは姫に、お城へ帰るようにいった。そして手をひっぱるようにして戸口から出て、蔦のはしごが下がっているところまで案内してくれた。姫は、この時初めて、お城に帰らなければならないことに目覚め、いそいそとはしごをのぼっていった。下を見おろすと、子どもたちの姿は全く見えなくなっていた。

このような幻想は、ドイツ文学を勉強していたころ、ドイツ浪漫派の作品を読みふけっていた時に始まる。ことに、ルードビッヒ・ティークの童話（メルヘン）は、私の心をひきつけた。ティークはたくさんのメルヘンを書いているが、わが国にはほとんど紹介されていなかったし、現在も同様な状態が続いている。

その後、私はドイツ浪漫派から離れたが、その作品の中に現われた幻想は、いつまでたっても私の心を離れなかった。それが、マールブルクを訪れた時に、私の心によみがえったものであろう。霧の中で、このお城に面とぶつかった時に、再び幻想にとらわれたものと思う。そして、十五年を経て、さらにホテルの小窓をあけて夜の気を吸い込んだ時に、この幻想が再び私の脳裏を占めたのであった。

その翌日、マールブルク大学の精神科の児童病棟を訪れた。以前、私が滞在していた時の古い建物はすっかり取り払われて、新しいデザインの建物に変わっていた。古い建物は、大きな木々に取り囲まれて、どの部屋からも暗い印象を受けたが、私にはその方に親しみがもてた。

今、近代的な建築に変わり、周囲にあった木々がすっかり取り払われてみると、確かに新しい装いに変わったけれども、はたしてそれが子どもにとっても母親にとってもふさわしいものか、いぶかしく思えるのであった。

九時から始まったビジテに参加する。このビジテというのは、ケース・スタディといってもよいものであろう。入退院の報告をする集まりで、教授を中心として全医局員がそれに参加することになっていた。二名の新しい入院患児について報告されたが、一人は犯罪少年のケースであった。小さい子どもを公衆便所に連れ込んで、絞殺しようとした例であった、と思う。ドイツの学風にふさわしく、環境論と素因論とが戦わされていた。ドイツの――そしてヨーロッパの学風には、素因論が根強く残っている。何か

というと素因に持ち込もうとする傾向があり、私はかねがね不満をもっていた。

特に、その少年の家庭は複雑であり、同じ家庭内に正妻とほかの女性とが同居し、きょうだいの数も六～七人という家庭であったから、詳しく家庭環境に原因を求めてみなければならないことと考えたのであるが、意外にも素因論が強く打ち出されていた。それにしても、西ドイツにも、崩壊家庭や複雑な家庭があり、裏から西ドイツの家庭をみると、決して健康なイメージだけで西ドイツの家庭をみることができなくなる。

家庭というものは、どこの国においてもさまざまな問題をもっているが、その中でゆがんだ人格を形成していくのが子どもたちである。家庭というもののむずかしさを、しみじみと思い返すことができた。

ビジテを終わると、医局長が病院を案内してくれた。ウェーバーさんが児童病棟を主宰していたころは、十六～七名の子どもたちが収容されているに過ぎなかった。子どもの数が少ないことを、ウェーバーさんは誇りにしていたほどである。ところが、大きな建物に変わり、近代的な施設、設備をもち、大勢の子どもが入院してくるとなると、そこで働いている職員と子どもたちとの親しい関係（ラポール）は阻害されてくる。以前、ウェーバーさんと子どもたちとの間にかもし出されていた暖いふんい気は、もはや、失われていた。そこには、大きな病院の冷たさがあった。

ヨーロッパでは、子どもの施設に関するかぎり、それが病院にせよ児童福祉施設にせよ、大きな規模となることを極力警戒している。私の恩師であるベンホルト・トムセン教授も、そのことをさかんに強調されていた。教授が日本に来られた時、日本の施設がその規模の大きさを誇る風潮があるのに対し、さかんに警告を発しておられたのを思い出す。わが国の幼稚園にも、子どもの数が多かったり、近代的な施設や設備を誇る傾向がみられるが、園長や職員と子どもたちとのラポールがはたして成立するかどうか、よくよく検討してみる必要がある。

病院内を回っていて、面白いできごとにぶつかった。それは、大きな子どもたちが収容されているへやに入った時のことである。へやの窓側のところで、十六歳の少年が、立ったままからだを前後にゆすっていた。ちょうど玩具の木馬が前後にゆれているような状態であった。近づいてみると、少年というよりもおとなに近い状態で、童顔はうせ、ひげが濃く生えていた。じっと一点を見つめたまま、同じようなリズムでからだをゆすっているのは、異様であった。

医局長の話では、ヘラー病の子どもで、すでに五歳の時から入

院し、今日の状態に立ちいたっているということであった。「終日、あのようにしているのですよ」と説明してくれた。

私は、かねがねヘラー病には疑問をもっていた。それは、自閉症と非常によく似た状態像を示すからであり、自閉症が発見されるまではしばしばこの診断名がつけられていたからである。

私は、その子どもに接近してみた。私よりすでに身長が高く、私の手が彼の手を握った時に、彼はチラッと私の顔を見おろすようにした。私に、なにがしかの興味をもったことがくみ取れた。そこで、私は、首からぶらさげていた写真機を彼の前に差し出し、その手に触れさせてみた。その時、彼のリズミカルな運動が一瞬とまった。そして、写真機に触れた。私は、彼の手をしっかりと握りながら、写真機のファインダーからのぞいてみてごらん——といった調子で、彼の目の前に写真機を差し出してみた。しかし、それには無関心の態度を示したので、私は急いでそれを取り去った。

その時、医局長が「先を急ぎましょう」と声をかけて廊下に出たので、やむなく私もその後を追う形になった。廊下に出て、「どのような根拠で、彼をヘラー病と診断したのですか?」と医局長に質問しかけた時に、彼がすうっと私のそばに来て、写真機に手を触れたのである。私はうれしくなり、写真機を彼の顔にかざして見せ、彼の肩に手をかけた。

それを見て、医局長はびっくりしたような顔つきをしていった。

「彼には、最近、このような行動は全く見られなかったのです。ふしぎだ!」

「私は、たくさんの自閉症児と接触しているものだから、彼も私に親しみを示したのではないかと思うが……」

「だから、自閉症児の扱いはすぐれているということになりますね」

そういいながら、医局長はその子どもの目の前の変化について、若い医局員に話してきかせたのであった。

おそらく、この子どもは、ヘラー病と診断されて以来、治療教育的な方法がとられずに現在に至ったのではあるまいか。ヘラー病は脳障害の範ちゅうで考えられている。わが国にも、自閉症が誤って脳障害と診断され、何の治療教育も受けずにいることが少なくない。もともと、医学的な診断の中には、診断をつけっ放しで、治療や教育につながらないものが少なくない。時には、親をあきらめの気持におとしいれるのが、医者の役割のようにさえなっている。

診断をつけるということは、医者の興味の対象であり、そのた

めにあらゆる訓練を受ける。しかし、その診断を親に告げたときに、親がどのような気持になるかについては、少しも考えようとしない。親は、診断などはどうでもよいのであって、その子どもをどのようにしたらよい子にすることができるかを聞きたいのである。その方法について教えてもらいたいし、医者に対してもその点での希望をつないでいる。

私が自閉症児の仕事を始めた当初には、それと同じような気持をもっていた。しかし、そうした子どもたちを見放すことができないような気持となり、試行錯誤ではあったが、いろいろな方法を用いることによって、自閉症児の治療教育に対する光明が見出せるようになった。また、脳障害のために異常行動を示していると考えられている子どもたちにも、治療教育の方法が少しずつわかってきたのである。

特に、子どもとの一対一のつき合いの中から、その子どもなりのよさを発見できると、それが緒口となって、次々とその子どものよさが発見できるものであることを知った。それと同時に、この考え方は、普通児といわれている子どもについても、同じような妥当性をもっていることを考えるようになったのである。

医局にもどって、コーヒーを飲みながら、私は、治療教育の体制をどのようにしているか質問した。しかし、その答えは、何もしていない——ということであった。その理由として、「心理学者を採用するに十分な人数が得られないし、自分たちもたくさんの子どもの診断に追われて、治療教育的な接近ができないでいる」という答えが返ってきた。

治療教育が行なわれないままに、ほうり出されたり長期に収容されている子どもたちは、なんと不幸なことであろうか？　私は暗然とした気持になり、このような病院から発表される研究には、価値をおかないことにした。これは、パリーでも経験したことであった。

病院を出ると、秋の陽ざしが明るかった。私は、HさんとYさんといっしょに、裏の山に登りながら、一日も早く不幸な子どもたちを救うために、世界の学界に向けてどのような発言をしたらよいかを考えていた。

（大妻女子大学教授）